

T Y K

TOKAIDO YOTSUYA KWAIDAN

東海道四谷怪談

二幕目

第三稿

原作／鶴屋南北

脚本／小中千昭

Animation Play by Chiaki J. Konaka

2005\07\12

登場人物

鶴屋南北

民谷伊右衛門……………浪人

民谷お岩……………四谷左門の娘／伊右衛門の妻

四谷お袖……………お岩の義妹

伊藤お梅……………伊右衛門隣家の武家娘

佐藤与茂七……………お袖の許嫁

直助権兵衛……………かつて伊右衛門の家臣

宅悦……………按摩／地獄宿主

小仏小平……………伊右衛門家の奉公人

秋山長兵衛……………伊右衛門の浪人仲間

四谷左門……………お岩の父

伊藤喜兵衛……………お梅の父

お槓……………お梅の乳母

お弓……………お梅の母

民谷源四郎……………伊右衛門の父

お熊……………伊右衛門の母

○イントロダクション

漆黒の闇。画面中央に小さく白い影が浮かんでいる。
抑圧的な音響が低く鳴り――

南北「(モノ) 『東海道四谷怪談』の物語は、歌舞伎だけでなく、後には講談や映画などに数多く語られてきた。

七台目一龍齋貞山は、戦前より『四谷怪談』を講談に演じていたが、寄席の名前が書かれた提灯が風も無いのに落ちる等の怪事が続き、昭和四一年に悶死した。死の際には『お岩さま』とうわ言を言っていたという」

白い影は徐々に近づいてきて――、焦点が合うとそれは、おぞましい「お岩」の面である事が判る。

抑圧音、頂点に達し――

○メイン・タイトル「TYK」

○江戸の町

歩く長身の男――、鶴屋南北。

南北「(モノ) 私の名は四世鶴屋南北。私の歌舞伎台本『東海道四谷怪談』は、巷で流れていた有名な怪談話を雛型にしていた」

○影絵

『四谷雑談集』表紙

南北「(モノ) 『四谷雑談集』という書に記録されているお岩とは、若い時に疱瘡を患った女で、気が強かったという」
武家娘のシルエット。

南北「家を潰さない様にと、御手先組与力・伊藤喜兵衛の知恵入れで、伊右衛門という浪人者を婿養子にとった。後に喜兵衛の悪知恵で伊右衛門と岩は理不尽な離縁をさせられ、それを知った岩は叫び声を上げながら江戸の町を走り、そのまま姿を消した。」

頭を抱え、凄まじい姿で走り去る岩のシルエット。
南北「その後、田宮家、伊藤家それぞれに十八人が命を失い断絶。人はそれを岩の祟りと噂した——」

○中村座

南北「(モノ)私はその筋とは全く異なる芝居を書いている。
だが——、この『東海道四谷怪談』の物語は、本当に私
が作り出したものなのだろうか……」

暗転

○民谷家玄関／前話リプライズ

伊藤家の乳母・お槓が、うすら笑みを浮べて立つ。
薬を受け取る伊右衛門。

お槓「これは主人の伊藤喜兵衛から預かりました薬でございます。
す。産後の血の道をよくするものと。是非お岩様に」

伊右衛門「これは——、かたじけない……」

お槓「ご近所のよしみ。是非とも民谷様には、伊藤の家にお出
で下さりますよう」

伊右衛門「ここまでの事をして下さるとは——、一度ご挨拶に伺
わずばなるまいでしょう」

お槓「(破顔)ではお待ち申しております」

頭を下げ、出て行くお槓。

寂然としない顔の伊右衛門。

宅悦「では、お岩様のお薬は早速——」

伊右衛門から薬の包みを受け取り、奥に行く宅悦。

その、薬の包み——。

毒々しい色が紙を透けて見える——。

○同／奥の部屋

蚊帳というシェルターの中で、赤子を抱きじっとし
ている岩。

伊右衛門、そして宅悦が戻ってくる。

宅悦「お岩様に、産後の血の道をよくするお薬を戴きました。

只今さしあげましょう」

お岩「今、聞いておりました。伊藤様のお屋敷にいらっしやるのですか」

伊右衛門「あまり気がすすまぬが、行ってくる」

お岩「今、羽織をお持ちします」

伊右衛門「（意外）——こんな貧乏暮らしな家に、未だ羽織がとっておかれたとはな」

お岩「武士の妻ですから……」

蚊帳の内側から、すつと差し出される羽織。

伊右衛門「……」

七輪の湯で、毒々しい色の薬を煎じた宅悦、蚊帳に近づく。

宅悦「ささ、お岩様、お薬でございますよ」

羽織をつけた伊右衛門、出て行く。

蚊帳を上げ、入っていく宅悦。

宅悦「しかし何でございますね。伊右衛門様はお岩様にちと冷めた過ぎでは。せっかくのお子まで生まれたのに」

岩に近づいていく、毒々しい薬の入った湯飲み。

お岩「——父の仇討ちをして下さるのですから……」

○伊藤家

裕福な武家の邸宅座敷。

馳走、酒の盆が多く並ぶ中、伊右衛門と長兵衛が、家主喜兵衛、その孫娘、お梅、乳母のお槇、お梅の母であるお弓らが向かい合う。お梅は臆せず、じつと伊右衛門を見つめる。

伊右衛門は居心地悪そうに酒を呑む。

と、隣の長兵衛、碗の蓋を開けてギョツとなり、伊右衛門に「見ろ」と促す。

伊右衛門「——」

碗の中には小判が沈んでいた。

喜兵衛「民谷殿には、それとは別にご用意致しております」
伊右衛門「何と……？」

喜兵衛、背後から風呂敷包みを出して、膝前で開く。
伊右衛門「！」

そこには積まれた小判が乗っていた。

伊右衛門「——ここまでの事をされる謂われなど、身共には覚え
がありませんが」

喜兵衛「——実は——、折入ってのお願いがございます」

伊右衛門「（警戒）」

○民谷家

お岩、薬の湯飲みを手にとり、飲む。

途端に、顔を顰めた。

お岩「苦い……」

宅悦「良薬は口に苦しと申します。ささ、飲み干して」

お岩「——（飲み干す）」

と、湯飲みを畳みに落とし、喉を掻きむしる。

お岩「ぐっ！ ぐげっ！ 焼けっ、焼ける！」

宅悦「お岩様！！」

○伊藤家

熱い目で伊右衛門を見つめるお梅。

喜兵衛「ここにおります、孫娘のお梅、早くに父親を亡くし、我
が儘な娘に育ってしましまして、欲しいものは何が何で
も手にしないと気が済まない性分でございます」

伊右衛門「……」

喜兵衛「このお梅、民谷殿をお見かけし、ずっと貴方様を想い焦
がれて参りました」

伊右衛門「——（意外）」

喜兵衛「民谷殿のお近くに、この別宅を設けてまで、お梅は民谷
様にお近づきになりました」

伊右衛門「——（嘆息）左様でしたか……。しかし——」

喜兵衛「(被せて) お願いでございます。このお梅と夫婦になつては戴けませぬか！」

伊右衛門「――」

○民谷家

苦しむお岩に、宅悦が水をとってくる。

宅悦「お水でございますよ」

お岩「早く……」

受け取り、飲み干す岩。

お岩「(はあ、はあ)――うっ！」

思わず両手で顔の半分を覆う岩。

宅悦「(怪訝) 如何されましたお岩様？」

低く呻き続けるお岩――。顔を抑えてうずくまり、
躰を蠢かせている。

宅悦「お、お岩様……？」

○伊藤家

喜兵衛「存じております。民谷殿にはお岩様という奥方がおられると。ですが、産後の肥立ち悪く、臥せってもおられる」

伊右衛門「だからと言って、理(ことわり) 無き離縁など出来ませぬ」

伊右衛門、お梅が薄ら笑みを浮かべている事に気づく。

喜兵衛「――無理と申されますか……」

伊右衛門「……」

と！いきなりお梅、立ち上がり、懐から剃刀を取り出す。

伊右衛門「！」

喜兵衛「お梅！」

お梅、刃を首に突きたてようとして

お梅「叶わぬなら、ここで梅は死にます！」

すがって止めようとするお槓。

お槓「お止めくださいませ！ お梅様！ お梅様！」

と！ いきなり喜兵衛立ち上がり

喜兵衛「民谷殿！ この喜兵衛めを殺して下さい！」

伊右衛門「！」

喜兵衛「実は、先刻ここにいるお槓に持たせました薬——」

伊右衛門「産後の血の道によく効くという——（悪い予感）」

喜兵衛「あの薬は——」

○民谷家

顔を伏せているお岩に、そっと手を差し伸ばす宅悦。

宅悦「あの……、お岩様……？」

顔をゆっくりと上げるお岩。

その顔を見て宅悦——

宅悦「（恐怖）ひっ、ひいひいっっっ！」

○伊藤家

喜兵衛「あの薬、命までは奪いませぬが、一口飲めば顔が崩れる
という毒薬」

伊右衛門「なッ——」

喜兵衛「——（手をつき）申し訳もございませぬ！ お梅可愛さ
の余りに致した次第！」

呆然とお梅を見る伊右衛門。

お梅は安心して立っている。

喜兵衛「お梅と祝言を上げて戴ければ、この伊藤の財産全てをお
譲りする所存でございます。どうか！ どうか！」

呆れた顔で聞いていた長兵衛——

長兵衛「民谷、ここまでのお話を受けぬとは了見違いだぞ」

じっと考え込む伊右衛門。

しかし、決心に至る。

伊右衛門「（長い思索）——承知いたしました……」

喜兵衛「（破顔）左様で御座るか！」

お梅、満面に笑みを浮べて伊右衛門を見つめる。

伊右衛門「……」

喜兵衛「思い立ったが吉日。今夜にでも仮の祝言を上げましょうぞ！ 良かったな！ お梅」

伊右衛門「――」

○民谷家前

玄関前に立ち、入るのにやや躊躇う伊右衛門。

○同内

ミシリ、ミシリと音をたて入ってくる伊右衛門。
蚊帳の中からお岩の声。

お岩「（オフ）宅悦殿、油を買ってきてくれたのですか」

伊右衛門「薬の効き目はどうだ……」
蚊帳の中にお岩はいる。伊右衛門、蚊帳の前に立ち

お岩「伊右衛門殿、お帰りなさいませ。何やらあのお薬を呑んだら、顔が妙に熱くなりました」

伊右衛門、蚊帳を上げて中を見る。

行灯の明かりで見える、顔が崩れた岩。

伊右衛門「……（嘆息）。顔が……」

お岩「私の顔などどうでも良いのです。ただ、この先短い命。私が死んだらこの子が不憫で……。私が死んでも、すぐに後妻などお迎えにならないで下さいまし」

伊右衛門「後妻だと？ ——そんなものはすぐに迎える。お前より美しく若いのをな」

この言葉の時、伊右衛門は未だ無表情でいる。

お岩「何と無慈悲な！ あなたという人はずっと身勝手だった！ ずっと我慢してきたのは、父上の仇を討って貰う為」

伊右衛門「（徐々に嗜虐の声に）仇討ちだ？ そんな事するなど未だに思っていたのか！ 下らん！」

お岩「（愕然）な……、今、何と仰ったのです……？ 父上の仇討ちを――」

伊右衛門「何の義理でそんな真似しなきゃならない。そうだ。不義理を先に働いたのはお岩、お前の方ではないか」

お岩「(混乱) 一体、一体何の事を——」

伊右衛門「按摩の宅悦とお前は不義を働いていたんだらう？」

お岩「そんな！ そんな事絶対ありません！」

悲痛な顔を近づけてくるお岩。伊右衛門、顔を背け

伊右衛門「金が急に入り用になった。その櫛をくれ」

お岩の頭の手を伸ばす伊右衛門。

お岩、咄嗟に櫛を抑え

お岩「これはたった一つの母様の形見。妹のお袖に渡さねばならぬのです！」

岩に触れる事を忌む伊右衛門——。

伊右衛門「ならこの蚊帳を売払うしかないな」

伊右衛門、蚊帳を外し始める。

お岩「おやめ下さい！ 蚊帳が無ければこの子が一晚中蚊に責められます！」

伊右衛門「知った事か。離しやがれ！」

力一杯蚊帳を引っ張る伊右衛門。

お岩の悲鳴「ぎゃああああああっっ！」

するっと引っ張れる様になった伊右衛門、蚊帳を見る。そこには生爪が鮮血と共に付着していた。

伊右衛門「——ふん」

蚊帳を放り出して行く伊右衛門。

バン！ その時、押し入れの扉が開き、縛られたままま転がりだす小平。

猿轡のまま、必死に訴える声を上げる小平。

伊右衛門「——出てくるな小平」

伊右衛門、小平の腰の小刀に気づき、抜いて家内に放り、小平を再び押し入れに蹴り入れ、閉じる。

○民谷家前

出てくる伊右衛門。と、油を買ってきた宅悦に出くわす。

宅悦「あっ、民谷様！ お岩様が——」

伊右衛門「伊藤家から貰った薬を呑んだら、そうだったんだらう」

宅悦「えっ、どうしてそれを——」

伊右衛門「伊藤の孫娘と今宵祝言を上げる。岩の面相を崩す薬も

伊藤の仕業だ」

宅悦「(呻く) 何と……」

伊右衛門「宅悦、貴様お岩にずっと気があったな」

宅悦「(必死に) 滅相もございません！ そんな——」

伊右衛門「お前、岩に言い寄れ」

宅悦「は……？」

伊右衛門「岩に不義理を働かせるのだ。その事で今夜中に岩をこの家から追い出す。いいな」

宅悦「しかし——」

伊右衛門、懐から小判を出して宅悦の胸元に入れる。

宅悦「……」

伊右衛門「しくじれば、斬る」

宅悦「(当惑)」

○同／奥

浮かぬ顔で入ってくる宅悦。

宅悦「只今戻りました」

呆然としているお岩。

お岩「——今、伊右衛門殿が……蚊帳までとり上げようと……」

宅悦、意を決しお岩に近づく。

宅悦「もうお休み下さいまし……。そうだ、少しお揉みいたしまししょう。ささ、横になられて」

宅悦、お岩の顔を見ない様に、岩の背後に回って肩に手を伸ばす。

お岩「！ そなたは武士の女房に何をしようとする！」

宅悦「伊右衛門様はもうお岩様を愛してはおられません。いつその宅悦と夫婦(めおと)になって——」

お岩、床に転がっていた小平の小刀を手にとり、刃を宅悦に向ける。

お岩「何と無礼な！」

宅悦「(必死に) おやめ下さいませお岩様」

お岩の刀を奪おうとする宅悦。揉み合う二人。
と、刀は柱に突き刺さり、崩れるお岩。

お岩「ああっ……」

肩で息をしている宅悦――

宅悦「今申し上げた事は、皆嘘でございます！　いくら宅悦でも、今のお岩様の顔では厭でございます！」

お岩「私の顔がどうしたというのです」

宅悦「伊藤家から届いた薬、あれはお岩様の顔を崩してしまふ毒薬でした。伊藤家の孫娘と伊右衛門様が夫婦になる為に仕組まれた事でございます」

お岩「二――（信じたくない）」

宅悦、鏡を手にし、お岩に向ける。

宅悦「これが――、今のお岩様の顔！」

鏡に映る、崩れたお岩の顔――。

お岩「――きいいいいいいいいいっっっっっ！！！！」

○伊藤家

お梅と並んで座る伊右衛門、仮祝言の杯を飲み干す。

○民谷家

宅悦から鏡を受け取り、己の顔をまじまじと見入るお岩。単に薬によって崩れたのではない。今、お岩の絶望と憎悪が一層お岩の顔を凄まじいものになっている。

お岩「――ここまでされたお礼を言いに、伊藤家に行かねば」
宅悦「えっ……」

お岩「こんな成りで訪問する訳にはいきません。鉄漿（かね）をつけて髪を梳かさねば。宅悦、鉄漿の道具を」

宅悦「お齒黒はいけません。お岩様はご出産したばかり」

お岩「――（宅悦を睨み）鉄漿の道具を」

宅悦「は、はいっ……」

鏡の前で鉄漿を楊枝でつけるお岩。だがその手は震え、口の周りは血の様に真っ黒に染まっっていく。その凄まじい形相に、宅悦はただ愕然と見ている。お岩、形見の櫛で髪を梳き始める。だが――、ブツ、ブツブツ――

髪は櫛に絡んで、頭皮から塊で抜けていく。

宅悦「ひ、ひいいい……」

お岩は、却って心を冷し、ただ怨念を髪梳きの行為に込めている。

ゆらり、と立ち上がったお岩。

宅悦「ひ……、ひ……」

お岩「このまま死ねば、伊右衛門殿は娘と結ばれる……。ああ……恨めしいのは伊右衛門殿……」

お岩、立ち上がったまま、動かない。

ひくっ、ひくっ、ひくっ、と僅かに痙攣をし――、力が脱けていく。

お岩「――一念通さしておくべきか……」

遠くを見据えた目を見開いたまま、お岩、息を引き取る。

宅悦「お、お岩様？……お岩様……？」

近づき、そっと手を伸ばす宅悦。と、お岩の躰、ぐらりと倒れ――、柱に突き刺さっていた小刀の刃で首を切られながら倒れ込んだ。

宅悦「(ただ絶句)」

ガタン、と背後に音がし、思わず振り向く宅悦。と、黒猫が入り込んでじっと岩を見つめていた。

宅悦「！ 死人に猫は禁物！ こらっ、しっ！」

猫を捕まえようとする宅悦。

猫は障子の裏に逃げ込む。

宅悦「出て来い性悪猫！」

と――、障子の向こうから出てきたのは――、猫の首を咬んだ大きな鼠。

宅悦「くはっ！――」

鼠、さっと逃げ出していく。

宅悦「こっ、こんなところにはもういられん！」

おたおたと逃げ出そうとする宅悦——、丁度入って
きた伊右衛門とぼったり出くわす。

伊右衛門「どうした宅悦、首尾の方は——」

宅悦「(混乱)いや鼠が！あの、大きな鼠がっ！」

伊右衛門、訝しみつつ部屋奥を見て——

伊右衛門「！——あの刀は小平の——」

バン！物置を開くと、縛られた小平が転がり出て
くる。伊右衛門、猿轡を取り

伊右衛門「——見ていたのか」

小平「お岩様があんな酷い死に方をしたのは、全部貴方様のせ
いじゃ！」

伊右衛門「あの刀はお前のだ。お前が岩を殺したのだな」

小平「(愕然) なっ——、縛られていた私がそんな真似出来る
筈がない！貴方様の罪を黙っている代わりに、ソウキ
セイの薬を私に下さい！私の主人の為に——」

伊右衛門「(嗜虐の炎) ——未だに薬の事を言うか——」

伊右衛門、刀を抜き二度三度と振るって小平を斬り
殺す。

○江戸の町／夜

雨が振っている——。

長い長い夜は未だ続く。

○民谷家庭

こん、こんと釘を打ちつける音が雨音に混じって聞
こえる。

戸板の裏表に、お岩と小平の死骸を打ちつけてい
る長兵衛。

と——、小平の手を打ちつけている時、小平の指が
それぞれ蛇になって蠢いた。

長兵衛「うわっ！」

のけ反る長兵衛に

伊右衛門「どうした」

長兵衛「い、いや……」

小平の指は戻っている。

伊右衛門「姿見川にその戸板を流してくれ。誰にも見られぬ様に

頼むぞ」

長兵衛「俺にも仕官の口を——」

伊右衛門「判っておる」

宅悦が大八車を運んできた。

と、玄関口から伊藤喜兵衛の声。

喜兵衛「(オフ) 御免。民谷殿、御免」

○同／玄関

傘を差したお梅と喜兵衛、お榎が来ていた。

伊右衛門「お待たせした」

喜兵衛「いささか気が早いかもしれませぬが、仮初めにも夫婦。

今宵より、ここにて暮らしをしたいと申しまして、お梅を連れて参りました」

お梅「——(俯き微笑んでいる)」

伊右衛門「——」

と——、奥から赤子の泣き声。

喜兵衛「民谷殿、その、お岩様は——」

伊右衛門「——下男の小平と共に、赤子を置いたまま駆け落ちして何処かへ去りました」

喜兵衛「(相好を崩し) 左様か。では、今宵赤子は拙者と、このお榎で子守をいたそう。伊右衛門殿は、お梅と——」

お梅、目を上げ、伊右衛門を見つめる。

伊右衛門「……」

○姿見川／橋の上

雨に濡れながら、大八車から死骸が打ちつけられた

戸板を引きずり下ろす長兵衛と宅悦。

橋の上から戸板を川へ落す。

宅悦「（小声）南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏……」

長兵衛「——ふん……」

○民谷家／奥の部屋

布団が敷かれ、伊右衛門とお梅は、距離を置いて向かい合って座っている。

行灯の明かりが揺れる。

雨音ばかりが聞こえてくる。

お梅は俯いている。

伊右衛門「——お梅殿、俯いてばかりしないで、その美しい顔を見せてくれ」

お梅「……」

ゆっくりと——、顔を、上げる——。

伊右衛門「——」

見惚れる程に、美しいお梅の顔。

伊右衛門「——お梅、殿……」

と——、喉を詰まらせた様な、奇怪な笑い声を漏らすお梅。

伊右衛門「？」

お梅の顔——、その片目が崩れ始める。

伊右衛門「（息を呑む）」

見る見るとお梅の顔はお岩のそれに変容。

お岩「（位相反転音声）い、え、も、ん、ど、の……」

戦慄する伊右衛門——。

伊右衛門「い、岩……」

後退る伊右衛門——、と、その手が己の刀に触れた。奇怪な動きで、ゆっくりと近づいてくるお梅。

伊右衛門、刀を掴んで抜く。

伊右衛門「岩！ 迷ったな！」

太刀を振るう伊右衛門。

